
義兄弟の憂鬱(酎×栞)

0434

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義兄弟の憂鬱（酎×棗）

【Nコード】

N1709B

【作者名】

0434

【あらすじ】

アニメ版の「九浄と棗は双子の兄妹」という設定を基に創作しました。酎×棗に対する九浄の気持ち。棗への気持ち。

九浄には最近悩みが出来た。

彼に悩みをもたらす人物は彼の双子の妹、棗・・・ではなく彼女に言い寄っている男…

「お兄様、ちよつと相談が」

2メートルに近い身長、モヒカン頭の酔拳の使い手、
酎にやたらと話しかけられる事であった。

「誰がお兄様だ。」

疲れたようにため息をつく。

酎は妹の棗に惚れている。

それは、余程鈍い奴でなければすぐ気付く。

第一回魔界統一トーナメントで棗と当たった時に惚れたらしい。

いわゆる一目ぼれである。

妹、棗をナンパしている様子を九浄はスクリーンで思いっきり見ていた。

それ以後、酎は一年以内に棗に追いついたら付き合っのを考えると
言う条件で、

日々特訓に励むと共に棗に戦いを申し込んで返り討ちにされる日々を送っていた。

「またまたそんなつれない事を、いいじゃないっすか。」

そう言つて酎は九浄に棗の趣味は何なのかとか、

男性の好みはとか好きな色はなどうるさく聞いてくるのだ。

そんな質問にいちいち真面目に取り合つてはいないのだが、

妹とこの男が結ばれたらどうなるんだろうと言う気持ちもあつて
心の中では無下にもしていない。だが。

「で？」

今回は何の質問が来るのだろうかとうんざりした様子を装いつつ
半ば好奇心で続きを促す。

「あのつすね、棗さんは昔どんな人だったのかなと・・・。」

「棗が・・・何故だ？」

予想外の質問に首を傾げる。

「いえ、昔からあんなに強かったのかと・・・。」

「そうだな・・・。」

棗は、昔はよくオレに泣きついてきていた。

「いえ、棗さんと九浄さんは本当に仲いいじゃないですか。」

「そうか？」

（まあ、兄妹だしな）

「そーですよ！」

「まったく、お前もあいつのどこがいいんだ？」

「そ、そりゃ強くて美しくて、それでいて儚げな雰囲気で・・・」

「あ～～分かった。」

（なるほどねえ、要するに全部って訳か。）

適当に話を切り上げて（逃げるとも言う）九浄は棗のところへ向かった。

今日は珍しく戦いの現場を見学しなかった。

戦った後なら、あいつ、喉渴いてるだろうなと思いながら。

酎が棗に勝負を挑む時の様子を思い出す。

九浄は勝負の度に、巻き添えを食らわない程度に見物しているのだった。

「ぐっ・・・。」

棗の技が華麗に決まり、酎はまた地面に転がされてしまった。

九浄はふふつと笑う。ざまあ無い。

「相変わらず遅いわね・・・。」

やれやれと棗は半ば呆れ気味に言う。

「いーや、俺は強くなってるぜ！一年後にはあんたよりもだ！！」

ぼろぼろの顔で、大口を開けながら笑う酎。

九浄はいつも、お前のその自信はどこから来るんだと突っ込んでいた。

「あんた、それで私があんたを好きになると本気で思ってるの？」
棗がため息をついた。

「いいや！でも俺は諦めねえぜ！！」

「……。」

可能性が無いかもしれないのが分かってるなら、
何のためにこんなにもぼろぼろになつてまで挑んでくるのか。
本当にばかね。

「ちよつと聞くけど、どうしてそんなやたらと突っかかってくるの？」

「いや、その……それが俺のスタイルつつか……。」

「私の基本的な型は「避ける」なの。あんたは真正面からかかって来すぎ」

「でも」

口答えをしようとする酎に棗はピシヤリと言う。

「打たれ強さが自慢のあんたより結果として受けるダメージは少ないの」

「うっ確かに」

「いい？ほら立つ！」

「はい！」

シヤキツと酎が立ち上がり、気をつけの姿勢をとる。

棗は、笑いそうになるのをやつとの事で堪えた。

「す、少しは避ける事を覚えなさい」

「おつよーやく気に止めてくれるようになったー！！」

「……バカね……。」

もはや、呆れて脱力するしかない棗（と九淨）であった。

「ふー……。」

酎がいなくなったのを確認して、棗はドサツと柔らかい草の上に倒れこんだ。

そして仰向けになる。

「どんどん……。」

追いついてくる。

それも、驚くべきスピードで。

棗には、それを喜ぶべきか嫌がるべきなのか分からなかった。

「おいおい、無茶すんなよ。」

声がしたと思ったら、

魔界の暗い空しか映していなかった瞳に一人の男の姿が入ってくる。

「分かってる。」

その男は彼女の双子の兄、九浄だった。

隣に座ろうとするのが見えたので仰向けから横向きになり、

彼に背を向ける格好になる。

「何しに來たの？」

「ほらよ。」

肩越しに差し出されたのは、茶碗に入った冷たい水。

「・・・ありがと。」

起き上がり、素直に差し出された水を飲み込む。

渴いた喉にその水が気持ちよく染み込んだ。

「いくら勝負だからって、本気でやりすぎなんじゃねーか？」

酎の奴またぼろぼろだったじゃねーか。」

「あーあっ悔しいけど、手加減できなくなるぐらいアイツが強くな

ったのよ」

投げやりな感じで九浄に言い、茶碗を九浄に返し、棗は再び横になった。

「信じられない、あんなに差があつたのが嘘みたい。」

「ふっ・・・」

九浄はくすつと笑う。

「何よ。」

「その割にお前、全然悔しそうじゃないぞ。」

棗の表情を探るように見つめる。

「あいつの事、どう思ってるんだ？」

「どうって...」

口ごもり、九淨から目を逸らす。

「いいから言えよ。」

棗は息を一つ吸って、吐いた。

「嫌いじゃない」

「へえ」

九淨は面白そうに妹を見る。

嫌いじゃない、か。お前の嫌いじゃないは

「バカで、むさいし酒臭いし。」

棗が言う。

「おまけにうるさいし、か？」

「よく分かるわね。」

九淨が相槌を打つと、棗も笑う。

「当たり前だろ。ならあいつと」

付き合う気は多少あるのか、と聞こうとしたら棗に割って入られた。

「もういいじゃない、あいつの話は」

「あのなあ、お前の事を心配して…」

「私の事は大丈夫よ。それより」

棗が自分を悪戯っぽい目つきで見る。

「何だよ。」

「私なんかに構ってていいの？あんたって昔っからそう言う事に疎いんだから」

文句がつけようのないぐらいにつこり笑って言う。

「ちっそれこそ余計なお世話だっつもの。んじゃな。」

決まり悪そうな様子をして立ち上がる九淨を、棗は微笑んで見つめた。

小さい頃からいつも一緒だった妹、自分の半身。

「ったく棗の奴、いつからあんなつまったんだか」

棗は変わってしまった。自分では気付いていないであろうが。

それは喜ばしい気がするけれど、面白くない気もする。

旧友、もとい喧嘩仲間であり夫婦である煙鬼と狐光の二人を相手に、

第一回魔界統一トーナメントの時に、

妖狐が花を咲かせた億年樹の下で酒を飲みながら愚痴をこぼす。

「な〜に言ってるのさ、棗はアンタの事スッごい心配してるっツいの。」

べろんべろんに酔っ払っている狐光が据わった目をしながら絡んで来る。

「はあ？」

「だって前、棗言ってたも〜ん！」

『九浄の奴は昔っから私の心配ば〜っかで自分の心配忘れてるんから』

「つてな！」

「？」

酔った勢いで多少言動が怪しくなっているものの、

突然の狐光の言葉に九浄は少なからず驚く。

「すまん九浄、こいつお前と会う前にもうかなり飲んでな」

煙鬼の言葉に九浄は笑って了解する。

「お前、その辺にいなさい。」

「うつせーよ！！まだまだ！！」

煙鬼が宥めるように言うのだが、狐光は煩そうに睨みつける。

相変わらずの二人に目を細め、

九浄がもう一杯酒を飲もうとしたら酔った狐光に突然耳を引っ張られた。

「な、何だ！？」

「こら狐光・・・」

煙鬼が止めようとするが狐光はそれにお構い無しに九浄の耳元で思いつき叫んだ。

「よ〜ック聞け！！」

『大切に決まってるでしょうが。たった一人の兄貴だもの。』

「・・・そりゃ、幸せになっただけいいわよ。」って随分前の事だけと言ってたんだぞ〜！！」

「うわっ」

狐光の声に耳が一瞬麻痺する。

狐光はというと言ふ事言つてすつきりしたように九浄の耳を離して酒を飲んでいる。

「な〜んか、俺つて立場ねえな?」

(あいつが、そんな事をねえ)

砂を払つて立ち上がる。

「何がだよ!?! 妹に心配かけてるのに気付きもしねーバカくじよー!!!」

「おいおい・・・」

「まあ、棗の事で何を悩んでるかは知らんがあんまし気にせん事だ。あんたら兄妹の仲は誰にも引き裂けはせんよ、もしお互い恋人が出来たとしてもな」

煙鬼は、九浄の気分が優れないのが何故なのか、薄々気付いていた。

「煙鬼、狐光。ありがとよ」

煙鬼と狐光が用意していた酒瓶を幾つかかつぱらつてきて、

九浄はある人物の姿を探す。ほどなくその人物は見つかった。

修行していた。

「おい、酎」

「あ、お兄さん!」

その呼ばれ方に抵抗があつたが、もう気にしないことにした。

「お前、酒飲めるよな?」

「もちろんですよ。俺は酔拳の使い手つすよ?」

「ふつならいい。」

「座れ、飲もうぜ。」

「は、はい!!」

大男が恐縮して色々気遣うのを見ていると微笑ましかった。

「あら? 酎、それに九浄じゃない。二人そろつて何やってるの?」

女の声がした。九浄はその声の主が誰なのかすぐに分かったけれど。

「な! ななな棗さん!!」

「よう、棗」

言って、九浄が杯を目線まで上げる。

「将来の、義理の弟と晩酌だ。」

「ちよっ……」

棗の顔が心なしに赤くなる。

「何言ってるのよ。大体あたし、そいつに負けてないわよ。」

「そ、それは……その……」

「いいじゃねえか、今日ぐらい見逃してやれよ。」

「……仕方ないわね。」

ふうつとため息をつく二人の間に座る。

「ほら、あんた杯出しなさいよ。」

「は！はい！」

緊張で小刻みに震えている酎の杯に酒を注ぐ。

「九浄は？」

「邪魔者は退散させてもらうさ。」

杯に残っていた酒を飲み干すと九浄は背伸びして立ち上がる。

「……ばか兄貴。」

そう言いつつも、棗は無理に九浄を引きとめようとはしない。

「いー加減、お互い素直になってくれりゃいいんだが……」

立ち去りながら九浄は思う。

『大切に決まってるじゃない、たった一人の兄貴だもの。』

狐光に教えられた言葉を思い出してくすつと笑う。今度、棗に言うてやろうか。

『お前が幸せなら、俺も幸せなんだからな。』と。
そう言ったらどんな顔をするだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1709b/>

義兄弟の憂鬱(酎×棗)

2010年10月28日04時40分発行